

# 戦争を体験した詩人の魂が現代を生きる人々に呼びかける

## 童話朗読劇 『とけた青鬼』

青コブはほんとうにずう体ばかりが大きくて、気の弱い鬼でした。鬼の岩屋を出てからもう三日。今日という今日はえものをとって帰らないと、鬼の王様にしかられるばかりか、きびしい裁判が……。

「しまったな頭をかかえて村の中をうろうろするばかり。ついに「よし、あの家にふみこんで、男の子をさらってやる」と思った青コブは、戸のすきまから様子をつかがい、聞き耳をたてました。母子の会話に青コブはうなだれ……そのときです。仲間鬼たちに連れ戻されてしまいました。

『ツメ切り・キバぬき・ツノもぎの刑』にかけられた青コブ。あと半日もたてば自然にとけて消えてしまふのが、のこされた運命でした。

いつのまにかふもとの村はずれに流れていた青コブ。そこで知った村人たちの苦しみ……。「けしからんッ」

そこで青コブが村人たちのために残りのいのちをかけてしたことは……。



童話・朗読劇『とけた青鬼』の舞台

## おとなの童話・みんなのお話

### 大型ペーパー『鬼の子の角のお話』

森のはずれのあばら屋に住む鬼の夫婦にこどもが生まれました。しかしその子には、いつまでたっても角が生えませんでした。鬼の夫婦はとても心配して、こっそり鎮守のお社に十日、二十日、ひと月とお参りしました。

すると、ある雨降りの晩。一匹の男鹿がかど口に立ち、「ぼくの角はたくさん枝が出ていますから、どの角なりと切り取ってお役に立てて下さい。さあどうぞ」きれいな眼をしてそう言いました。

すもつ仲間の黒い大きな牛は「ひとつわしの角を進呈しようと思つて……」と。また、しばらくたつと一匹のいのししが土間にころげこみました。「ありがと、いのしし君。……しかし、君のキバは大切な仕事道具じゃないか。その気持ちだけをお願いだ」そのうち裏の藪の二本のたけのこが訪ねてきて……。

「なんてみんな親切なんだ。それなのに、わしは自分の角を息子にやることに気づかなんだ」動物たちの心に感謝をこめて、夫婦が話しかけていると……。

### 青少年の感想から

▼とけた青おにを聞いていろいろなことを思いました。こころやさしい青おにが村の人をいじめたところ、この世界が青おにのやさしさにつつまれば、へいわな毎日がくると思えます。すごくなける童話でした。

(小学三年男子)

▼いそながさんの詩はすごく意味がわかりました。詩『とら』は自分をとらにたとえて戦争のことをかいたのがよくわかりました。せんそうのこわさがわかってよかったです。

(小学四年生)

### 磯永秀雄・略歴

磯永秀雄（一九二一年〜一九七六年）は、学徒臨時徴集で南方に送られ、九死に一生を得た戦争体験から一九五〇年、山口県光市で駱駝詩社を創設し、五五歳の生涯を閉じるまで山口県を拠点に、多くの人人に役に立つ詩や童話を作り続けた全国的に名高い詩人です。

磯永は、思まわしい戦争体験をへて日本に帰ったとき、残された命を詩人にかける決意をしたといっています。彼は『修羅街挽歌』で描かれているように戦場で苦しみ死んでいった幾多の戦友、戦争の惨害をなめた幾千万の人人の側に立ち、平和で繁栄した日本の建設のために詩人として奮闘し続けました。

山口県では没後五年ごとに磯永詩祭が開催され、二〇一一年、下関市での没三五周年には七〇〇人が参加し、戦争体験者も現役の世代も小中高生たちも、未来に生きていく糧を得たと深い感動を共有するものとなりました。

▼おにの大切なつ、きば、つめがなくなつたおにが、自分が死ぬ前に人が喜ぶことをしたところが感動しました。ほかに、最初の『おにの子の角のお話』も、ほかの人たちのために、なにかをしてあげるといふ、動物たちや、たけのこたちの心に感動しました。(小学五年男子)

▼一つ一つの文字に魂が込められているようで、劇にひきこまれるような感じがしました。また、その内容の『修羅街挽歌』なら、磯永さんが戦争から戻ってきて、その苦しみの場面を劇で表現していて、すごく感動しました。私たちは、戦争の苦しさを知らないけど、この劇を見

て、戦争のひきこなさを感ずることができました。『とけた青鬼』の童話では、私も青鬼のように、心やさしい、みんなから信頼される人になりたいです。この劇は私になにか、かけがえのないものをあたえてくれた気がします。(中学一年生)

▼磯永さんの詩を聞き、彼の生き方、感情などに心を打たれ涙が出てしまいました。『とけた青鬼』の話もたいへん楽しく聞くことができました。戦争が終わった後、気力をなくし自分に語りかける磯永さんの姿、俺は詩人になる」という言葉が印象に残りました。

(高校二年女子)

### 夜が明ける

磯永秀雄

夜が明ける  
小鳥たちを起こせ  
花は もうめざめて待つている  
花はいつも  
空を指さして咲き  
根にかえる日のために みのる  
ゆうべ ひと夜さ  
鳴りをかえしていたきみの中の海  
寄せては返していた波の音―きみの呼吸を

ふいごの音に変わる朝がやってきた  
下にあく小鳥たちのまぶた  
上にむかつてあくにんげんのまぶた  
朝の床の中のつかのま  
きよう一日のたたかひの  
起伏と波動の見とおしのかなたの一点  
連帯の渦を広げゆく沖の一点をみつめな  
おし  
フル回転のエンジンのスイッチを入れ  
まぶたをはっきり開いて  
さわやかに床を蹴って起きるのだ  
きようもまた 革命である  
しかり きようもかの水平線―わが能力  
の限界へ挑もう  
夜が明ける  
まだまだ足りぬ人びとへのあつい思い  
まだまだ学ばねばならぬ大衆の実践  
さらに まだまだ歩き 語り 励まし合  
わなければならぬ  
炎の結集  
夜が明ける  
わが海も かの海の青さを取りもどそう  
太陽との対面の姿勢で  
きよう一日は  
はつきりと  
きまる

